

既に夕闇があたりを包み始めていた。温泉宿の女将に導かれ、一棟ずつに分かれた個室温泉の一部屋に入ると、簡単な脱衣場の向こうには裸電球のオレンジ色の光に照らされて、湯船いっぱい温泉が注がれお風呂が湯気をあげていた。

あああああ〜〜、これを待ってたの〜〜！！

亜丁での1週間、連日の登山で汗をかき、廃屋で眠り、雨に降られ、泥だらけになって過ごしていた毎日。高所では湿度が低く、それらもさほどは気にならないとはいえ、やっぱりお風呂は日本人の心の故郷だ〜。服を脱ぐのももどかしく湯船に身体を沈めると、後は言葉にならない幸せ……。好きなだけお湯に浸かったり身体を洗ったりした後は、かけ流し状態で湯船に注いでいる温泉と沢の水、2本のパイプの蛇口を捻ってお湯の温度をぬるめにする、忘れずにザックから取り出して持ってきていた文庫本を読み始めた。

天井から一つぶら下がっているだけの裸電球に照らされて、オレンジ色に染まったお風呂に浸かり、サラサラと溢れては流れ出てゆくお湯の水音を聞きながらゆっくり読書する、至福のひと時……。たっぴり2時間かけて温泉からあがり、宿の縁側に座って夕涼みしていると約束通りシャムウの友人である青年の運転するタクシーが私を迎えに来てくれた。先ほど彼に渡されていた、例によって稲城中のタクシードライバーが使っていると見られる、個性のない名刺には『李陸海(リ・ルー・ハイ)』と彼の名前が記されていた。

お茶を飲んでいかないかと誘ってくれる女将に、運転手が待っているからと丁寧に断って浮世辺絶温泉を出た。本当にここは素晴らしい温泉宿だ。今度稲城に来る時も、また絶対立ち寄りう……。

車に乗り込むとお腹がペコペコだった。考えてみれば、朝の出発前に亜丁の宿で軽く麺を食べただけだ。夜になってもまだ亜丁を離れてしまった寂しさから抜け出せず、人恋しくなっている私は運転しているリ・ルー・ハイに声をかけた。

「ねえ！ お腹がすいちゃった。一人でご飯を食べるのは寂しいから一緒に行かない？ 食事は私が奢るから、どこかいいお店に連れて行ってよ。」

だがリ・ルー・ハイは私が温泉に入っているのを待つ間に食事は済ませてしまったらしく「俺は今食べたばか

りだから、お腹いっぱいだよ〜」とつれない返事だ。

「じゃあ、あなたは食べなくてもいいから一緒にいてよ！ 私は寂しくて一人になりたくないの」

もう眠いしあまり気乗りがしないといった様子のリ・ルー・ハイだったが「ちょっとだけ！」と熱心な私の言葉に「まあ付き合っただけか」といった雰囲気「何が食べたいの？」と私に聞いた。「餃子がいい〜」

3年前に稲城を訪れた際、案内をしてくれた烏里氏に連れて行ってもらった餃子屋が強く印象に残っていた。あの店にもう一度行ってみたいと思い、亜丁に出発する前日にたいして広くも無い稲城の街中を一人でグルグル歩き回ってみたが、見つける事はできなかった。

「君の言っている店かどうかは知らないけど、餃子なら俺の友達の店があるからそこに行こう」

夜の早い稲城の街はどの店もシャッターを下ろしていたが、リ・ルー・ハイの連れて行ってくれた路地裏の小さな店はまだ明かりを付けていた。閉店しようとしていたところに、ぎりぎり滑り込んだような雰囲気だ。

そこは私の探していた思い出の店ではなかったが、ちんまりとした感じの良い店で、リ・ルー・ハイの友達だという若い店主は、閉店間際に飛び込んできた客を迷惑そうな様子も無く受け入れてくれた。「俺は腹いっぱいだから、君が好きなものを頼みなよ」という彼の言葉に焼き餃子、水餃子、青菜の炒め物といった、私の知っているものを数品頼むと、程なくして運ばれてきた料理はどれも素朴な物ばかりながら、私がこの旅で食べた物の中でも一番美味しいと思える味だった。

美味しい、美味しいと喜ぶ私に「この店は稲城で一番旨い店なのさ」とリ・ルー・ハイはちょっと得意そうに答えた。料理を食べながら、この旅行中チベット民族に対して抱いていた、素朴な疑問の数々をリ・ルー・ハイに問いかけてみた。

「ねえ、チベットの人達はとても熱心にお祈りするけど、どんな事を祈ってるの？」

それまでに通り過ぎてきた何処の街でも、チベット族の人達の信仰心はとて厚く、地面に身を投げ出して、ひたいを地に擦り付け祈る五体投地は有名だし、お寺に来てなにやら熱心に祈りながら、経文の書き綴られたマニ車の周りを何度もグルグル回っていたり、一度回すと

に一度お経を唱えた事になるという、赤ちゃんのおもちやのようなハンディタイプのマニ車を暇さえあれば回しているお婆さんをみかけたり、普段の生活と神様への祈りが一体化しているような彼等の様子は、私達がお正月やら旅行先で訪れる神社仏閣で、または困った時の神頼みで時おり思い出したように日常の雑多なアレコレをお願いするのは訳が違う、何やら仏教世界への深遠な祈りが込められているように思っていた。

お坊さんならいざ知らず、普通の庶民までがあんなに熱心に、いったいどんな事を祈ってるんだろう・・・

「え？ どんな事って・・・普通の事さ。例えば、家族が元気で末永く暮らせますように・・・とか」

リ・ルー・ハイは笑いながら言った。

「じゃあ、恋人がいない男の子は彼女ができますように・・・とか？」

「そうそう。それでもし彼女がいる場合は、このままずっと付き合えて、彼女と結婚できますように・・・とかね」

「アハハハハ・・・」

何だぁ・・・やっぱり何処の国の人も同じなんだ。なんだかちょっぴり安心した。自分にも彼女がいて、やっぱり彼女との事をお寺で祈っているというリ・ルー・ハイは、私の質問に答えながら家族の事や私がこれから訪れたいと思っているチベット族の土地や、ダライラマの亡命についてチベット自治区以外のエリアに住むチベット族がどのように感じているのかなど、色々な話をしてくれた。

「それじゃあ、あのね・・・」

リ・ルー・ハイの気さくな人柄につられて、私は以前にこの地を訪れた時から気になっていたけど、ちょっぴり人には聞きづらかった事について質問してみた。

「チベットの人達は亡くなったら、その身体を鳥に食べさせる習慣があると聞いているけど、それは今でも行われているの？」

私が海外を旅する事に興味を持ち始め、異国の文化について記された書籍などを読むようになってから得た知識の中でも、各国さまざまな様式で死者を弔うお葬式の習慣は興味深いものだった。

どんな世界に暮らしていようと、人が生きていれば必ず向き合わなければならない人生の終着点である死を、その民族がどのように受け入れ、死者の魂をあの世へ送り出すのかという習慣は、時に国や民族によって大きな隔たりが

あり、異国の文化を尊重し理解しようという気持ちが未熟だった年若い頃の私には、その文化の違いに戸惑いや違和感を覚えるものも多かったが、特に奇異な印象を受けた弔いの様式の一つが、このチベットの「鳥葬」だ。

書籍の中にはその慣習を日本人の視点からのみ捉えて、ことさら興味本位におどろおどろしく書き立てているような物もあり、その儀式の内に込められた意味など知りもせず、人間の肉体を切り刻み鳥に食べさせてしまうというイメージだけで捉えた弔いの様式は、遺体を仏様と呼んで死化粧を施し、よそ行きの着物を着せて大切に扱うのが一般的な日本文化の視点からみれば、やはり残酷で衝撃的な印象だった。

その後、経験としては未だ乏しい回数ながらも、あちこちの国を旅する機会を重ね、海外に暮らす体験を経ているうち、次第に心の垣根は取り払われていったし、郷に入らば郷に従えとその土地の文化を受け入れる能力が備わってくると共に、異国の慣習を奇異な物に思う感覚は無くなっていったが、それでも「鳥葬」という独特なチベット式の弔いには、どこか強く興味を惹かれてしまう気持ちがあった。

だが「鳥葬」という弔いの存在を知った頃の私が得た情報によれば、チベットを自国の統治下に置こうとする中国共産党の弾圧により、そのような残酷な風習は認めないとの禁止令が出されて、現在では殆ど行われる事はなくなっているというような話も聞いていた。

十数年前にネパールでのヒマラヤトレッキングで赴いたチベット系民族のシェルパ族の村では、村はずれの山を暫く登っていったところに大きな平べったい岩があり、チベット仏教の経文がピッシリと書き込まれたタルチョが張り巡らされて、何か独特の気配が立ち込めている場所があった。その場所がどうも本で得た鳥葬場の知識と一致しているような気がして、同行していたネパール人の友人に尋ねてみたが、彼が村人から得た話では、そのような儀式が執り行われていたのは過去の話で、現在は行われていないのだという事だった。

そんな経緯で、私の中で「鳥葬」は現在のチベットでは殆ど行われていない過去の風習なのだという意識が、勝手に出来上がっていたのだが、それではこの土地に住む人々は、現在はどうのように弔われているのだろう。

ネパールの旅でシェルパ族の村を訪れた事があるとはいえ、当時、私の興味の対象はそちらの方向には向いておらず、事実上は三年前の亜丁の旅で、ほぼ初めてチベットの文化や人々の暮らしに触れた事になる。その時に素朴な疑問として湧いてきたこの質問を、帰りのバスの中で案

内人の烏里氏に聞いてみると、答えは意外な事に「鳥葬」だった。え？ じゃあ、あの一緒に山を登った少年も、花園で可憐だった女の子もみんな最後は鳥に食べられちゃうの！？頭の中では理解しているつもりでも、やはりそのイメージは強烈な印象だ。

もっと深く突っ込んで烏里氏に質問を続けたい気がしていたが、やはり死者の弔いというデリケートな問題に、外国人が興味本位で質問してくる事を、烏里氏が好ましく思わない気配が伝わってきたので、その時の私は沸きあがってくる質問を飲み込んでいた。

「うん、そうだよ。今でもやってるよ」

私がおすすと切り出した質問に、リ・ルー・ハイはあっけらかんと答えた。

「じゃあ、あなたも？」

「そうさ。俺たちチベット族は、みんな死んだら鳥葬だよ」

それはごくごく普通の事だというのが、彼の話し振りで伝わってくる。

「じゃあ、稲城にもそんな場所があるの？」

「いや、稲城には無い。この辺の人達はみんな理塘に行くのさ」

え？ 理塘？

理塘なら三年前にも訪れているし、今回の旅でも稲城の次の目的地は理塘だ。

あの街に、そんな場所があるのかな？ 前回の旅で一日滞在した理塘の街は、まるで西部劇に出てくるガンマンの様な風貌の遊牧民達が、ゆうゆうと街を闊歩する姿に目を奪われたりはしたが、市場やホテル、ディスコなども有

るそれなりに普通の街だった。

「鳥葬の場所って行ってみたいなあ・・・」

私が言うと、

「今度稲城に来た時に、遊びに連れて行ってあげるから俺に電話しなよ。あそこは本当にとっても綺麗な場所なんだぜ！！」

よりもよって、死者の身体を刻み鳥に食べさせるというお葬式の場所に「綺麗なところだから遊びに行こう」と言ってくれるリ・ルー・ハイのくったくのなさが好ましくて、私は思わず笑い声を上げた。

リ・ルー・ハイとの会話はとても楽しかったし、チベット民族の意識や価値観のあり方を教えて貰えた充実した物だった。お腹もいっぱいになった事だし、店を閉店させるために、私達が帰るのを待っているであろう店主にも申し訳ないので、話の途切れた適当なところで私達は席を立った。もともと眠いからと、私の誘いにも乗り気でなかったリ・ルー・ハイは本当に眠そうだ。

ホテルまで送ってもらおうと約束のタクシー代を支払い、次に亜丁に行く時には必ず電話して彼の車に乗っていくという約束をすると、楽しかったひと時のお礼を言って彼と別れた。ホテルのフロントでは、働いているのか同僚とおしゃべりしているだけなのか、まだシャアムウがそこに居たので、お休みの挨拶をしてから部屋に戻った。

今日一日が楽しく終えられたのも、シャアムウが良い友達を紹介してくれたからだ。朝はまだ亜丁にいたのだと思うと、この日も長い一日だった。私はベットに横になったかと思うと次の瞬間には眠り込んでいた。(次号に続く)